

<b>Title</b>	善光寺開帳と浄瑠璃：元禄七年開帳時の反映
<b>Author</b>	林, 久美子
<b>Citation</b>	文学史研究. 46 卷, p.1-14.
<b>Issue Date</b>	2006-03
<b>ISSN</b>	0389-9772
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学国語国文学研究室
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# 善光寺開帳と浄瑠璃

## —元禄七年開帳時の反映—

林 久美子

はじめに

三国伝来仏の阿弥陀如来が古くから貴賤男女の信仰を集めてきた善光寺では、中世以来開帳を行なって衆生に礼拝結縁の機会を与え、浄財を集めたことが知られているが、近世になると伽藍再建や修理に必要な奉加を募るため、三都開帳と大規模な回国開帳が行われた。三都開帳は、寛文六年（一六六六）落慶の本堂を修建する目的で、元禄六年（一六九三）六月の江戸回向院における開帳から始まった。五十五日間にわたる江戸開帳は大盛況で、それまで十軒ばかりしかなかった宿屋では諸国から集まった参詣人を収容しきれなくなり、これをきっかけに宿屋が増加したという。江戸に続き、上方での開帳は、翌元禄七年（一六九四）六月から京都東山真如堂、九月から大坂四天王寺で行われた。『元禄雜記』の収支記録に拠れば、回国開帳中の純益は、江戸が九千九百兩余り、大坂が一万兩とほとんど差がない。上方でもかなりの賑わいと、経済的文化的活況がもたらされたようである。三都での莫大な収入をもとに再建を始めた善光寺は元禄十年二月から工事に着手するが、門前町の火災による類焼のため、建築中の本堂や用材が全焼してしまう。そのために、幕府の梃入れで、元禄十四年（一七〇一）から宝永三年（一七〇六）まで五年間をかけた全国回国開帳

が実施されることになる。関西では宝永二年二月十五日～三月十五日に京都八坂庚申堂で行われた。

その後も寛保元年（一七四一）京都養源院、安永九年（一七八〇）京都・大坂・堺、寛政八年（一七九六）伏見桃山、池田、大坂などにおける開帳が記録されており、それぞれの開帳が当時の社会に及ぼした影響は看過できないものがあると思われるが、とりわけ収入の大きかった元禄、宝永期には、興行界にも多大な影響を与えた。

宝永期の開帳については、加賀掾の『雁金文七一周忌』と竹本義太夫正本『善光寺御堂供養』に同二年の京阪での開帳時の当て込みがあることが、井上勝志氏によって指摘されている。後者は近松門左衛門が添削した作品で、その上演は、従来『外題年鑑』によって享保三年と推定されてきたものだが、これが井上氏によって訂正されたのである。

これを受けて小稿では、1、その前の元禄七年が上方の善光寺開帳物のピークであり、歌舞伎も浄瑠璃も当て込み上演を行っていたこと。2、『本田善光一生記』みだしやか開帳』は同年の刊行物であること。の二点について述べることにしたい。

ここに取り上げる資料は、演劇とテキストの成立の問題にとどまらず、善光寺開帳の実態と影響力の大きさを伝える資料としても有益で

あり、庶民の信仰と芝居という娯楽がいかに分かちがたく結びついていたかを知らせてくれる。

### 一、出羽掾、角太夫の浄瑠璃

善光寺の縁起は、聖徳太子伝とも重なり合っていることもあり、全国を行脚した聖たちや、平安末期以降に作られた多くの縁起類によって民衆に広められた。<sup>8</sup>近世の演劇は、そうした唱導活動によって流布した説話や利生譚をふまえて成立したと思われ、説経操として興行された記録が残っているのも、宗教的色合いの濃さを物語る。けれども、現存する善光寺関係の演劇作品を通して見えてくるのは、むしろその独自性である。

善光寺ものの古浄瑠璃はおもに伊藤出羽掾一門によって語られた。寛文二年に正本が刊行された『月界長者』と、刊年の特定できない山本角太夫（土佐掾）一派の『善光寺』（または『善光寺堂供養』）である。角太夫が語った開帳物は多数に上るが、とりわけ善光寺の浄瑠璃については『摂陽奇観』（巻二十一）に「信州善光寺如来京都または大坂へ出開帳の節は必ず角太夫の芝居其辺りにて興行に及ぶ」とあって、彼がいかに開帳に依存していたかを伝える。そしてまた、その流行のほどを知るには多種の正本の存在だけで十分だが、享保四年（一七一九）の歌舞伎評判記の記事に、「山本角太夫が善光寺の堂供養にて木戸口は人死のあるくらゐを思へば又古ひ格にあぢしめまひ物でもない」（『役者芸相撲』三力津序）<sup>10</sup>、「是を思へば芸者の身の上にも。あたらしい事のみ工夫して古格じやとよい事をすてゝ。手ばかりがあらふと思はるゝ。善光寺の上るりて銭もうけし。けいせいあさまが獄を

四度して。大人を取しを思へば古格をすてふ物ではないぞや。」（『役者五重相伝』京の巻序）<sup>11</sup>と評されるのを見ると、その息の長さもわかる。江戸でも好評を博した上方元禄歌舞伎の代表作『傾城浅間獄』と並べられるほどに練り返し上演され、興行的成功を収めているというのである。

『善光寺（堂供養）』の早い正本には、延宝六年板、貞享元年板があったようであるが、いずれも現存しない。現存する上方の正本が刊記を持たないのは、みな再板であるためであろう。正本以外にも阪口弘之先生蔵絵入本零葉や出羽掾の絵入道行本、絵入小本などが刊行されているが、それらの本は開帳をはじめとする話題が提供されるたびに販売されたものと考えられる。たとえば、安永九年の開帳時に刊行された浄瑠璃絵尽し『善光寺人仏供養』<sup>14</sup>は、外題はのちの義太夫正本と同じ『善光寺御堂供養』であるが、内容は『善光寺（堂供養）』と一致しており、角太夫の浄瑠璃がこの頃までも語られていたことがわかる。

はじめにも触れたように、京都では東山真如堂で元禄七年六月二十四日から八月三十日まで善光寺仏の開帳を行った。類焼後の出開帳は宝永二年の八坂庚申堂であったが、同年四月に再建が始まり、四年（一七〇七）八月に棟上、現在の如来堂の落慶をみるに至る。

じつは、上記角太夫系の多くの浄瑠璃本の本文末にも堂供養の場があり、絵入本には餅撒きの挿絵まであるため、この作品も義太夫の『御堂供養』と同じく、やはり実際の祝賀の様子を当て込んだものと思われるのだが、江戸板諸本には、その部分の本文がない。上方板を省略して作られている江戸板の読み物としての性格からすれば、ストー

リに影響しない場面として削除したという考え方もあるのだが、翻刻本文八行半にわたる文字数がすっぽり欠けていることが、むしろ自然に思われる。そして、これら江戸板の題名は「善光寺開帳」ではなく、「善光寺の本地」である。ここから、はじめのタイトルは「善光寺の本地」で、その後の開帳時に御堂再建を寿ぐ文章を付け加え、「善光寺堂供養（新築の堂を供養するという意味のタイトル）」としたことが推測される。成立を考える際には、巻末に「洛陽如来寺の本尊」の由来が語られることが鍵になるが、残念ながらこれについては手がかりがつかめていない。はじめの本文に堂供養の祝儀を付け加えた上方板本文の成立については、江戸板の一種が元禄三年に刊行されていること、角太夫の没年が元禄十三年と推定されていること<sup>18</sup>を受けると、その間とするのが妥当ということになる。けれども、上棟式が宝永二年であるから、角太夫没後に増補し、太夫名を出して刊行したと考えるしかない。

ほかにも、角太夫正本の刊行については問題がある。京で開帳が行われた元禄七年に刊行された本が見あたらないことである。以下に述べるように、元禄七年は上方の興行界では善光寺開帳もののブームで、続々と上演された年であった。当然、角太夫も語り、その正本が出たはずだが、それに該当するものが同定できない。それが逆にこの一門の興行姿勢―新作せず、古い作品をいつまでも語り続けるという、ある意味で合理的なやり方―を物語っているのかもしれないが、あるいは形を変えた刊行物がそれにあたるものとして売り出されたのかもしれない。

## 二、「本田善光一生記みだしやか開帳」

ここに、角太夫の『善光寺開帳』の改変本とされている風変わりな一本がある。『古浄瑠璃正本集』第九に付録として収められている『本田善光一生記みだしやか開帳』という作品である（外題は「善光寺如来開帳 寝釈迦の不思議 善光三世相」）。内題の「本田善光一生記」は、推定角太夫正本「善光寺堂供養」天理本の題簽「善光寺」の左にある小書き「本田よしみつ一生記」と共通しており、両者の関係を推測させるものである。この作品について、『古浄瑠璃正本集』第九付録三の解題では次のように記されている。

本作は、「善光寺堂供養」（善光寺）のダイジェスト的な作品である。しかし、例へば、角ある馬が、藤平の父のあの世での姿であると、それに、善光弥生の三世の因縁を語らせたり、行基菩薩や、その弟子隔夜上人（どうゑん）を新たに登場させるなど、説経の色あひが深められてゐる感じがある。したがって、浄瑠璃といふよりも、説経と呼んでよいやうな作柄であるが、一方、文体や構成から言へば、絵入狂言本に近い。しかし、狂言本と断定するには、板元が正本屋五兵衛であること、更に題簽の形式等から問題もある。（五七六頁）

内容と形式の両面から浄瑠璃らしからぬ点を述べられている。さらに付け加えれば、この本には浄瑠璃の段分けも、浄瑠璃らしい語り口もなく、「昼は善光如来を負い、夜は如来が……」の有名な文句も、「如来、善光を肩に上げさせ給いければ。御身より、光差し。異香花降り、瓔珞迦葉の声もる共。いづく共なく、落ち給ふ、有がたし有がたし」

(四九六頁) とリズム感のない説法調になっている。<sup>20</sup>

内容に関しては、プロットの順序が異なるほか、浄瑠璃本にはない独自部分がいくつもある。たとえば、秀俊の家臣に新左衛門という人物が登場し、御家騒動物の家老的役割を担っていることなどである。しかし、御家騒動に付き物の、主人の為の流浪や艱難などはなく、主要人物ではない。これは現存する角太夫系正本より古い原本があつて、それを省略した結果であるのか、独自に加えた役柄であるのか、これだけでは判断しにくい。同じく正本屋五兵衛板である説経正本「をぐり」とその点で似ているかもしれない。

もっとも重要なのは、「古浄瑠璃正本集」解題で「説経の色合いが強い」と指摘されているように、なぜか行基とその弟子が登場し、最後に行基が印文を授かつて衆生に仏縁を結ばせるという点である。

まず、善光寺説話の主要場面である阿弥陀池の場で、行基がその仲立ちをしていることが挙げられる。善光は、阿弥陀池で行基の弟子隔夜道心と出會つて、彼から如来の由来を聞く。

「私は、泉の国久米田村行基和尚の弟子にて候。然るに、行基、御前生は。大唐にて空正と申僧にて有しが。大唐より、日本へ、如来、来らせ給ふ時、御守り申、渡し給ふ。其後、かの如来を、守屋大臣、此池へ沈め給ふ□、阿弥陀が池と申候。師の坊、是を聞召、如来を守り奉らんと。此池に來り、の給へば。如来、告げ給はくは。我には、深き契約なせしもの有。則、名をば、本田善光といふ。此人を尋ね、此所へ來るべし。其時、対面有べしと有故。行基は申に及ばず。我々まで、方々尋ね候。是成池を、阿弥陀が池と申候と教へける。」<sup>21</sup>(四九四、四九五頁)

ここで行基の弟子とする隔夜道心に苜蓿道心を連想するのは無理であろうか。善光寺聖と高野聖の結合と説経世界への関与については既に指摘されて久しい。<sup>22</sup>この本の挿絵に描かれる隔夜は、衣の前をばだけ、番傘を一本持つて阿弥陀池にかけつける下層聖であり、「さんせう太夫」の国分寺の聖の面影も認められる。

次に行基である。阿弥陀池から仏を引き上げようとするのが聖徳太子であつたことは、多くの太子伝ものの文芸で語られ、「善光寺縁起」にも記される周知の伝承である。その役割を行基に振り替え、行基の弟子を出したのには何らかの必然性があるはずである。行基は入唐していないが、師の道昭が長安で玄奘に師事したこと、行基も唐の仏教から学んでいる。さらに、善光寺縁起で百済から善光寺如来が來航した港は「難波の浦」であつたが、行基と難波ノ浦との結びつきも、東大寺大仏の建立とかかわるいくつかの伝承に記されるところである。<sup>23</sup>そうした伝承との関連付けが行われて、「本田善光一生記」が編まれたのかもしれない。作品の最後に行基は皇極帝から菩薩号が与えられ、諸人を仏と結縁させるが、「仏法伝來次第」<sup>24</sup>によると、行基は大仏造営の勸進役として天平十七年(七四五)正月に大僧正になり、天平二十一年正月、平城中嶋宮において天王に菩薩戒を受けた日に大菩薩となつている。大坂と仏教、天皇と民衆をつなぐ人物であることが、この作品に行基が取り込まれる基底にあつたようである。

そしてまた、行基には三昧聖としての顔もある。この作品での行基は、弥生の死によってみなし子となつた善介を越前「うはのが原」に伴い、悪人藤平を教化しようとする。また、閻魔から如来の印文を授かり、<sup>25</sup>天王の蘇生を乞う。近世には、三昧聖が東大寺の勸進職の支配

下にあったので、行基の三昧聖としてのイメージがこの説経的作品に投影されたのかもしれない。天和・貞享年間には、公慶の大仏殿再建勸進によって、重源<sup>26</sup>、さらには重源が尊崇した行基への関心が高まった時期とされている。貞享元年、公慶上人は幕府に大仏の破損修補と大仏殿再建勸進の願書を提出し、翌年五月には勸進帳を刊行し、大仏縁起の講談を行っている。近松と義太夫が提携した第一作「出世景清」<sup>27</sup>がこれを当て込んだものであったことは、信多純一氏<sup>27</sup>、大橋正叔氏<sup>28</sup>によって明らかにされている。大仏開眼供養が行われたのは元禄五年（二六九二）である。「本田善光一生記」はこうした流れの中に成立したと考えられる。おそらくは太夫の関与なしに、板元によって編集され、販売された出版物であろうが、角太夫の興行に乗じて売られたことは考えられる。板元五兵衛は大坂平野町の本屋であるが、角太夫は「京都または大坂へ出開帳の節は：必ず其辺りにて興行に及ぶ」（『撰陽奇観』）と記される。大坂での上演時には、大坂の正本屋が参詣客の土産用に本を作り、売り出したのであろう。この本には当時の開帳を当て込んだ改編が見られる。

### 三、開帳の反映—印文、常燈明、寝釈迦

このテキストの後半部には、「寝釈迦因縁」という見出しのもとに、涅槃の釈迦の由来が、印文授与、常燈明の因縁とともに記されている。次に簡単に内容を記す。

善光は如来を略奪したとして捕縛され、弥生は病死する。残された善介は、如来に燈明も上げられず泣いていると、如来の御身から光明が輝き、燈籠に火がともる（常燈明の因縁）。弥生は地獄

に行き、皇極帝と対面する。行基に連れられて「うわのが原」へ行った善介は、地獄で母弥生の前と再会する。閻魔は行基に如来の印文を授け、行基は閻魔に天王の蘇生を願って聞き入れられる。地獄が破れてもとの「うわのが原」に戻る。弥生の前は膚の守りの涅槃の釈迦が仮に人間として現れたものであった。改心した藤平は行基の弟子となり、善介を伴って釈迦を都まで負い参らせる。行基は善介とともに、御印文と寝釈迦を蘇生した皇極帝に差し上げる。帝は善光に信州の領地を与え、如来を移して善光寺と名づけ、行基には菩薩号を与える。

このように、本話では善介の墮地獄と女帝との対面、善光が如来を背負って遷座させるという重要場面がすっかり改変されている。そして涅槃の釈迦が本尊の阿弥陀如来より大きく取り上げられ、常燈明、



図1 『本田善光一生記并みだしやか開帳』（慶應義塾図書館斯道文庫蔵）

印文とともに作品のキーワードになっている。これらは先行の出羽角太夫系正本には出て来なかった。それというのも、これらは開帳を反映したものだからである。挿絵の最後にある開帳図(図1下)にも涅槃の釈迦が描かれており、本尊を中心になつた弥生が昇天するからくりを描いてきた出羽角太夫系絵入り浄瑠璃本とはまったく趣が異なっている。もうひとつ、由来が語られている常燈明もやはり寺宝である。『善光寺縁起』には、貧しい善光のため、如来自身の眉間から光を放ち、燈明に火をともした時の偈「一度見常灯 永離三惡道 何況挑香油 決定生極樂」(元禄五年板卷第四)があり、「常燈明の四句文」として知られる。それが、この作品ではみなしこの善光の前で行われることに改変されている。坂井衡平氏の年表によると、元禄七年に常燈が寄進されているので、それを当て込んだのかもしれない。

また、宝印は善光寺の宝物の中でも特別な存在とされている。

宝印三顆は、孝徳天皇の白雉五年に、我仏を錦帳の内に深くこめ奉れる時、我仏の深きみこころおはして、大檀越三世若麻績緒身に授け給へるにて、我寺第一の重宝なれば、毎年正月七日より十五日まで、結縁のため参詣の諸人に頂戴せしめ、巡国または三都開帳のをりは、前立本尊に添て大内に奉り、いはまくもかしこけれど、主上を始め女御更衣までもいただき給へる宝印なり、俗に御印文頂戴といふは是なり(『芋井三寶記』上 五八四頁)<sup>29</sup>

常燈明については、演劇作品では都万太夫座の歌舞伎『日本月蓋長者』にも取り込まれている。この作品のはじめに、越後の国主が如来堂建立の為に都へ上る所へ、如来へ常燈明を上げたいという女人が登場する。自分の兄に殺された夫の菩提を弔うためであり、身を売って

も燈明を上げたいと願う、「貧女の一灯」を想起させる話となっている。このように京都での善光寺開帳が当て込まれていることから、『日本月蓋長者』は元禄七年の上演と推定されている。<sup>30</sup>

涅槃の釈迦についても、元禄、元文、享和、文政期の江戸開帳時には、本田善光・善佐・弥生の像、印文、常燈明、聖徳太子像とともに運ばれていたということである。<sup>31</sup>けれども『元禄宝永回国勸化記』宝永二年七月十六日の行列の運搬物の記録には、御印文、縫の像の善光三体と絵縁起などが並ぶものの、涅槃の像は記されていない。したがって、『本田善光一生記』は宝永時の開帳ではなく、元禄七年京開帳時の当て込みとして刊行された本であると推定する。元禄七年に釈迦涅槃像が出て話題になったことは、次の諸資料によって確認できる。

a 『基量卿記』

六月廿三日晴 信濃国善光寺本尊此日入洛先着御於智恩院自今日出真如堂五十日之開帳為善光寺本堂破損奉加也 寝釈迦一体金仏善光夫婦像繪之由也 等同如来開帳之由也 洛中群集□□由也

b 『諸国落首咄』(元禄十一年刊) 第一之卷「都の沙汰ハ善光寺の開帳」<sup>32</sup>

元禄七年戊の五月の事なりしが、みやこ真如堂にて信濃の国善光寺の如来を開帳ありしが、御守迎御印もんを鳥目百文にひとつづ、いだされしに、都の人々是をたつとひ、貴賤群集して、立子いざる子まで、いたゞかぬものもなかりしに、其ころ、とんさくなる人ありて、よめり、

御印もん百にふたつハマかるべし みだの本願四十八もん  
扱又寝じやかとて有しが、是もせんくわうじの如来と一所に開

ちやうありけるに、とりわけはやらせて参銭大ぶんあつまりしと、  
都ハ是ざたなりしに、又よめり、

おきてさへゑとらぬ銭を寝取ハ 信濃のしやかと野良けいせ

い  
なお、現在は善光寺の世尊院釈迦堂に、この等身大の涅槃の銅像  
(重文)がまつられている。

#### 四、『和訓三部経』

宇治加賀掾の語った浄瑠璃『和訓三部経』も、元禄七年開帳の当て  
込みであることが知られている。<sup>33</sup>印文は、この作品の下巻、善光寺如  
来が守屋を切利天に誘引するところに出る。「其間のしるしには此印  
文を残し置。たとひごくちう悪人成共印文うくる輩は。往生うたがひ  
有べからず」(二三四頁)。「本田善光一生記」と同じく、極楽への切  
手として語られている。また、涅槃の釈迦をも題材にしている。この  
作品の上巻は天竺月蓋長者の巻で、月蓋長者の懇望によって阿弥陀如  
来の分身を鑄写したとき、釈尊自身も結縁のために、口から出した  
涅槃像を長者に与える。この涅槃像は中巻「震旦聖明王の巻でも、阿  
弥陀如来とともに正明太子の前に現れる。そして、下巻「日本本田善  
光の巻で、善光の父が懐妊中の妻を連れて漁をしている時に聖人が妻  
の口に入り、その時取った蛤から、この涅槃の釈迦像が光を放って現  
れる。善光の父はこの奇瑞を、聖徳太子が難波の港に如来像を迎えに  
来た時に語る。太子は御手を合せて像を礼拝し、これを崇拜する。つ  
まり、縁起における善光をその父に、如来を蛤中の釈迦に変え(御伽  
草子『蛤の草紙』や漂流伝説による発想であろうが)、難波堀江の

場面をもじっているのである。

この続きは聖徳太子と守屋の葛藤となり、お定まりの展開になるの  
だが、テキストをよく読むと、不思議なことに気づく。守屋のために  
火中に投じられ、堀江に投げ込まれた尊像は、その涅槃の釈迦だった  
はずなのだが、水上に出現し、善光に過去の因縁を語り、彼の肩にか  
かったのは閻浮檀金の阿弥陀仏なのである。これは、この作品が守屋  
を提婆達多の転生としたため、釈迦と提婆達多の葛藤を入れる必要が  
あったのだと考えられるが、いつの間にか釈迦が阿弥陀にすりかえら  
れ、観客をはぐらかしている。霊験譚にはトリックが生かせる。おそ  
らく多くの観客はこのすりかえに気付かないまま、見物していたので  
はなかるうか。信濃に安置される仏像は閻浮檀金の阿弥陀像と釈迦涅  
槃像の二体になっているのであり、本文には「涅槃像を御厨子に移し。  
閻浮檀金の尊像は白の上に安置らる。」と書かれている。釈迦と阿弥  
陀の二仏を安置するのは開帳の実態に合わせたものと考えられる。  
『本田善光一生記』みだし「やか開帳」の挿絵(図1下)を見ると、阿  
弥陀如来を中心に、右に釈迦、左に聖徳太子が祀られているが、台座  
に乗った他の二像に比べ、釈迦がとて大きく、ゆったりと横たわってい  
る。開帳記類によれば、本尊の弥陀は一尺三寸五分であり、挿絵は  
相応に描かれているようである。しかし、釈迦の方は、『和訓三部経』  
では蛤の中から出現していたので、はじめは小さかったはずである。  
その疑問を解いてくれる説明も本文に書かれていた。守屋のために火  
中に投じられ、鑄物師に吹きたてられた時、不思議なことに一寸八分  
の尊像が二尺になり給い、さらに吹きたてられると五尺余りになった  
というのである。じつは、文政三年江戸開帳時の記録には五尺五寸の



釈迦涅槃像があり、「海中より出現」としている。<sup>35</sup>この伝承をもとに作られたのが本作なのであろう。

### 五、義太夫「弱法師」

この釈迦涅槃像の大きさを明記しているのが、義太夫の語った浄瑠璃「弱法師」である。これは、同名の謡曲と説経「しんとく丸」をもとにした御家騒動物であるが、その中大坂四天王寺における善光寺開帳の当て込みがある。すでに藤井紫影氏「近松全集」<sup>37</sup>および信多純一氏「加賀掾段物集」が、文中に「長月の中の五日」とあることから、この作品を元禄七年九月開帳時のこととされている。京都での大成功の後である。まず、本文第三段に善光寺の印文の利生譚がある。

是は一とせ父上の信濃ノ守にて有し時。川中島にてうけ給ひみづからに給はりし。善光寺の御いんもん是をいたゞくともがらは。たとひ悪人なりとてもみらいは西方浄土にいたり。此世は病なん水火のなんとへばつるきの下にふす共。其んたちまちのがる、とやうたがひ給ふな我つまと。おもてにおほひどうをんなになむあみだ仏となへ給へば。をとろへはてし御かたちもとのごとくにくるはしく。しみて久しき両がんはあさ日のごとくあきらけく。みつの御はんはありくとかみにうつつておがまれ給ふ。ぶつぼうふしきといひながら。きたい千万なか／＼にありがたかりけるしだいなるはおがまぬ。人こそなかりけれ(四三七〜四三八頁)

これは『しんとく丸』では乙姫役にあたる露の前が、継母の呪詛のために盲目になった夫俊徳丸に出会い、父親からもらった善光寺の御印文を頂かせて開眼させたくだりである。挿絵(図2)には、宝珠形

の枠の中に文字を記した御印文札が描かれる。<sup>38</sup>次に引用するのは第五段中の俊徳丸のせりふである。

別而は又某義悪人共におそはれて。暫さそらへ候折からるれいにおかされ候所に。露のまへ所持せらる善光寺の御印もん。ちやうだい致し候へばたちまち病苦をまぬかれ世に有がたく存れば。信濃へ参詣致さんと存立候所に。此度ふしきに御本尊並にしやか仏ねはんのそんさう。善光善佐やよひの御影。天王寺へらりりん有諸人におがまれ給ふよし。是幸の仏えんなれば早々参詣申たし。(四五〇〜四五二頁)

引用部分後半に、涅槃像が、本尊や善光ら三人の御影とともに天王寺で開帳されていることが話題になっている。そして、以下のように、開帳に向かう行列の後先までおそらく当時のままに描写されている。少し長くなるが、そのまま引用する。

此事よにも。かくれなく国々所々の老若は。ふなじ陸路をこへく、て御かいちやうをおがまんと。皆天王寺にまうでけりはや御入寺も時来れば。くんじゆのきせん一どうにくはんきの辰とゞめかね。



図2 『弱法師』(東京大学総合図書館蔵)

手を合てこそみたりけれ。先青龍の御はたに。善光寺とかきたるを二行にわかつてをし立る。扱其次のほうれんは。聖徳太子の御そんざう御じさくとかくれなき。我朝の大ほんじまつせの今月今日迄。たへずとうたり日のもとむぶつせかいをてらさせ給ふ。

じやうとうみやうもあきらけし扱ほうとうは三ぶくつい。善光善佐やよひの御影何うたがひもあらしふく。のちのたみくさなりけれど。うちなき人も玉のこしのりのしるしとおがむ也。先仏法の一ふしき二つ共なきみつのはん。浄土ひみつの御印文によらいのみさきにたて給ふ。しゆせうにも又有がたや。あとの御こしはししやかむにぶつ。一寸八分のねはんのざう。御たけ五尺三寸にぶんじ給ひしくはうみやうぶつ。しやうぞくのりきしや共以上七十三人にて。手車にのせてゆくさうのけいごはしよしよくにん。太子かうちう日参のせんもん。せんににいたるまでせいみやうのこゑもる共に。さいもんちかく入給へば御むかひのれいじんは。其やく／＼をと、のへてかうだうにうつし入。玉のうてなをきはめ給ふげにがんせんのごくらくとおがまぬ。人こそなかりけれ（四五―四五三頁）

引用箇所には、開帳のために入寺する行列のさまが群衆の歓喜の様子とともに写され、善光寺阿弥陀如来と聖徳太子の像のほか、印文と常燈明のことまで記されている。入來の列については、1、「善光寺」と書いた青龍の旗 2、聖徳太子像の鳳簾 3、常燈明 4、三幅対の宝塔 5、三つの印文 6、如来 7、涅槃の釈迦の順に、七十三人の手車によって運ばれたこと、その警護に諸職人、太子講中、禪門、禪尼が当たったこと、声明が唱えられる中、西門近くまで行列が

入ると、俗人たちによって楽が奏せられ、その後講堂に移し入れられ、まさに極楽のような情景が現出したことが記されている（傍線箇所は、『本田善光一生記』、『和訓三部経』と共通する宝物）。ここには理由は示されないものの、一寸八分の涅槃像が五尺三寸の光明仏になったことが記され、『和訓三部経』独自の発想ではなく、そのような言い伝えが喧伝されていたことがわかる。

これが近松の作であるとすれば、まさに「当て込む」ことだけを意図した急ごしらえのものであったと思われるが、<sup>39</sup>四天王寺における善光寺開帳を知る上では、挿絵を伴う有難い資料になっている。近松が添削した『善光寺御堂供養』は、次の宝永二年における京八坂庚申堂開帳時の本文で、その前に京都で上演されている角太夫正本『堂供養』と加賀掾の『和訓三部経』（後述）の両先行作をつきあわせて利用しているのと通じる手法である。

#### 終わりに

諸作品を並べてみると、元禄七年の京都、大坂における開帳時の様子と人々の熱狂ぶりがよくわかる。これまで取り上げたもののほかに、京都では身替り仏の利生譚がある村山座の『阿闍世太子倭姿』が同年に上演され、大坂では『弱法師』に続いて岩井半四郎座の『善光寺開帳』（『京阪歌舞伎年表』『歌舞伎年表』による）が大人を取り、上方の善光寺ブームは年末まで続いた。

これらの影響を受け、印文と常燈明は、次の開帳時の演劇にも登場する。角太夫の浄瑠璃をもとに仕組んだ、宝永三年（一七〇五）江戸山村座の歌舞伎『三国伝来仏』がそれである。すなわち、善光が家代々



図3 『三国伝来仏』（東京芸術大学附属図書館蔵）

の宝である閻魔王宮の印文を礼拝すると池水より如来が出現する。また、まゆわの介か首打たれた時、印文を口に含んでいたのて死ななかつた（図3は、まゆわの介かたんけい坊の体を借りて広風を追うところ）。そのまゆわの介の首か空に上り、貧女の一灯を捧げたおかげで男子に生まれ変わったと言うや否や、くす玉のように二つに割れて輝き、

これが今の世まで常燈明となった。このような奇妙な由緒や奇瑞を、からくりで見せたのである。さらに巻末では、悪臣広風の執心が印文を奪い、観音となった天皇が取り返して終わる（図4）。ここで観音が印文を取り返すのは、この作品が浅草観音での開帳時のものだからである。挿絵では、印文は『弱法師』同様、小さな刷り物として描かれている。平賀源内の『菩提樹之弁』は、その次の安永期の開帳を挿したものだか、印文授けについて、次のように記す。

扱又極楽海道の切手なりとて御印文を戴かす。若し地獄極楽ある物にしてからが、一念念仏を念じ善根を積んでこそ極楽へも至るべけれ。夫れさえ上品上生より下品下生に至るまで、九品の浄土の別ち有つて、めった漫に極楽へは行かれぬと聞きしに（中略）

相場に構はず、百文で極楽の切手の安売り、世智辛い人間ども、二百出して蹴転を買うては、ちつとの間の楽しみなり。其の半分の百たして、億万劫か

其の間、百味の飲食振舞はれ、天人を掲げ詰めにして蓮の台に店賃入らずの活計欲楽、是れ程安いものはないと、我一と戴いて、只さへ善事は嫌ひにて、悪作りたかる凡夫ども、御印文を楯についで、額に極印かすわつたからは、つがもねえとんな悪い事しても地獄へ落ちる氣遣ひなしと、衆生を安堵させるは、跡をかまはぬ肝煎か、判賃取らう計りに、どこやらへ遣るべき宿なしを奉公にありつかせ、主人の難儀かけまくも、忝くも如来ともいはるゝ程の身を以て、さりととは不埒千万なり。<sup>40</sup>

引用文から、印文は額に点押するこ印文頂戴形式と紙に捺した札の両方があったこと、その値かなからく百文のままで、極楽の楽しみを味わうにはあまりにも安かったことがわかる。百文というのは、『諸国落首咄』の元禄七年開帳時と同じ値段である。衆生かこそって求めたものか文芸に投影したのであった。



図4 『三国伝来仏』（東京芸術大学附属図書館蔵）

小稿で取り上げた善光寺開帳ものの演劇は、縁起にとらわれることなく、御家騒動の枠組みを用いながら、開帳の話題を積極的に取り込んでいた。浄瑠璃の中、角太夫正本については、元禄七年開帳時にも古い正本のままに語っていたのか、開帳の当て込みを加えた改訂版を上演したのか推定しかねるが、正本のありようからは、時と場所にかかわらず、開帳の都度繰り返し上演したのが一門のスタイルとみてよいようであり、それがいくつもの影響作を送り出した要因と考えられる。それに対して加賀掾の作品は、物語の枠組みは『月界長者』と同じ三世の物語としながら、元禄開帳時のトビックスである釈迦像を中心に展開しているところが新しく、地獄語りを伴っていない点でも、善光寺ものとしては珍しい作品になっている。一方、義太夫正本『弱法師』では、ストーリー展開に関連づけた宝物は御印文のみの、自然で地味な用い方であったが、開帳の風景そのままの描写が開帳資料としての価値を有している。上方を代表する太夫三者三様のあり方が興味深い。

演劇が歌舞伎も含め、いずれの座においても、開帳に沸く民衆を取り込もうとしたのは当然のことであるが、善光寺側にとっても、縁起から大きく離れた空想的な演劇は絵解きそのものとは異なるので、自らの利益に抵触するところは少なく、むしろ霊仏霊宝のありがたさを庶民に宣伝すること上の媒体だったのであろう。その相乗効果にあやかり、板元は上演テキストとともに、形態や内容を模倣した本を作り出したようである。

本稿は二〇〇五年六月八日、九日に行われたSOASでのシンポ

ジウム (Japanese Foundation of Myth) における発表用原稿を改稿したものである。多くのご教示を賜った阿部泰郎氏、徳田和夫氏、真如堂吉祥院副住職竹内純照氏と、資料の閲覧と掲載許可をいただいた諸機関に感謝申し上げます。

#### 注

- \* 1 鷹司誓玉氏「善光寺の回国開帳」(『仏教大学研究紀要』五二、一九六八年三月)には、『名月記』『実隆公記』の記事が紹介されている。
- \* 2 坂井衡平氏「善光寺史 下」(一九六九年、東京美術)第五章第二節。「長野県史 通史編 第五卷近世」(一九八八年)第四節「善光寺と諏訪神社」による。
- \* 3 石川雅望「都の手ぶり」、「ばくろのまち」の項。
- \* 4 鷹司氏注「論文一九二頁」。
- \* 5 比留間尚氏「江戸の開帳」(一九七八年、吉川弘文館)、前掲『長野県史』参照。
- \* 6 「元禄宝永回国勸化記」(新編信濃史料叢書第十四卷、一九七六年、信濃史料刊行会)、および坂井氏「善光寺史 下」所載の年表による。
- \* 7 井上勝志氏「宇治加賀掾・山本角太夫」(『国文学 解釈と教材の研究』四七―六、二〇〇二年五月)。なお、井上氏は宝永三年の京都における開帳資料として『新補倭年代皇紀絵章』および『鸚鵡籠中記』を引かれている。
- \* 8 現在その内容を知ることのできる最古のものは『扶桑略記』引

用の記事であり、その時までには縁起が成立していたことを示している。残存するものでは『続群書類従』所収の応安縁起があり、これ以降永縁起、寛文版縁起へと発展する（小林一郎氏『善光寺如来縁起 元禄五年版』一九八五年、銀河書房）。

\* 9 『尾陽戲場事始』に、寛文八年尾頭町で天満十太夫によって「横笛瀧口」と共に「善光寺開帳」が興行された記事がある。

\* 10 享保四年正月刊。『歌舞伎評判記集成』第七卷（一九七五年、岩波書店）所収。

\* 11 9 同右。

\* 12 『古浄瑠璃正本集 角太夫編第二』（一九九〇年、大学堂書店）、十四番秋元鈴史氏解題。

\* 13 『信濃の国せんかうじ御りしやう記』、『撰陽奇観』所収本および辰巳屋貼込帳（注12解題および口絵写真）。

\* 14 板元山本春太夫。『撰陽奇観』卷之三十五所収本。

\* 15 『如来三都廻国』（注1論文）、『続史愚抄』（増補改定 国史大系十五）所収、二〇〇〇年）による。ただし、『基量卿記』（宮内庁書寮部）は二十三日とする。後掲本文参照。

\* 16 この部分の本文を十行三六丁本によって示す（節譜は「三重」以外省略）。

扱大がらんさうそくの。ち引の石はしら立。むね上さま、いはひこと。たくみのとうりやうそくたいのそれく、のいしやうをちやくし屋のむねにあがり。しよてんじん地じんしゆごじんちしゆごじんそなへしみきを奉り。扱日本の御神残らずなふじゆまし／＼て。みだうあんをんならしめ給へと。めでたきむねのつちのをと。

ちやう／＼と打おさめ。扱屋のむねにそなへたる。いはひのもちいとり／＼にきせんくんしゆの其中へ。花めづらかにまきにけるさしきの程こそ（三重）ゆ、しけれ

\* 17 若槻保治氏『古浄瑠璃の研究』第一卷（一九四三年、桜井書店）に貞享元年四月刊行の西沢太兵衛開板『善光寺堂供養』が存した（巻末欠丁のため刊記、所属は不明で、角太夫の「善光寺」と九分九厘まで同文）とあることとの矛盾については、原本が確認できないのでひとまず置く。

\* 18 信多純一氏「山本角太夫について」『古浄瑠璃集 角太夫正本（一）』（一九六一年、古典文庫）。

\* 19 横山重、室木弥太郎、阪口弘之氏編、一九八一年、大学堂書店。

\* 20 同様の語り収めに「善悪不二の夢物語、有かたし有かたし」（五〇二頁）がある。

\* 21 句読点は正本集の本文のまま、平仮名は適宜漢字に改めた。

\* 22 五来重氏『善光寺まいり』（一九八八年、平凡社）

\* 23 たとえば、『日本霊異記』中巻第七縁、蘇生した智光が発露懺悔するために会いに行くところで、「時に行基菩薩難波に有して椅を渡し江を堀り船津を造らしめたまふ。」第三十縁「行基大徳、令堀開於難波之江、而造船津」、あるいは、『三宝絵』巻中の記述「天皇、東大寺ヲ作給テ供養シ給ハムスルニ、講師ニハ、行基菩薩ヲ定テ、宣旨ヲ給ニ、行基ハ、其事ニタヘス侍リ。外国ヨリ大師来給ヘシ。ソレナムツカウマツルヘキ。ト奏スレハ、供養セムトスルホトニ成テ、撰津国ノ難波ノ津ニ、大師ノムカヘトテユク。（略）難波ノ津ニイタリテミレハ、人モナシ。行基、闍伽一具ヲ

ソナヘテ、ソノムカヘニイタシヤル。(略)シハラクアリテ、波羅門僧正、名ハ菩提トイフ僧、来レリ。闕伽、又、コノ舟ノ前ニウカヒテ、ミタレスシテ帰来レリ。菩提ハ、南天竺ヨリ、東大寺供養ノ日ニアハムトテ、南海ヨリ来レリ。(以下略)。

\* 24 『統群書類従』第二五輯下(一七七九年)

\* 25 行基や隔夜上人の聖的性格からすれば、善光寺の僧侶のうちでも特に時宗の妻戸衆の投影をみるべきかもしれない。あるいは、「元禄九年七月、輪王寺宮が大勧進、大本願に下した裁許の文中に、御印文の儀、常々は先規の如く堂童子執り行うべしなどともえて」、「善光寺堂童子は古来善光寺三寺の中衆(浄土宗十五坊)が行ってきたことが明らか」(善光寺鏡善坊若麻績修英、英亮氏作成の「堂童子」HP)であれば、堂童子についても考察すべきかもしれない。

\* 26 平岡定海氏『大仏勧進ものがたり』(一九七七年、大蔵出版)。

\* 27 『出世景清』の成立について(『国語国文』二八―六、一九五九年六月)初出。

\* 28 「浄瑠璃史における貞享二年」(『近松の三百年』一九九九年、和泉書院)。

\* 29 『信濃史料叢書』第三(一九一三年、信濃史料編纂会)。

\* 30 『元禄歌舞伎傑作集 下』では、同年夏芝居と推定。

\* 31 吉原浩人氏『善光寺如来絵伝』覚え書―絵相並びに絵解き研究の課題―(『伝承文学研究』一、一九六一年九月、三弥井書店)、尾崎行也氏「近世における善光寺の出開帳」(『善光寺本坊 大勧進宝物集』、一九九九年)。

\* 32 『嘶本大系』第十卷(一九七九年、東京堂出版)。

\* 33 信多純一氏『古浄瑠璃集 角太夫正本(一)』(一九六一年、古典文庫)、『古浄瑠璃正本集 加賀掾編第三』平田澄子氏解題、同氏「歌舞伎・浄瑠璃と仏教説話」(『国文学』、二〇〇四年四月、学燈社)。

\* 34 『古浄瑠璃正本集 加賀掾編第三』。ただし、仮名は適宜漢字に改めた。

\* 35 注31尾崎氏論文に紹介の「今井家文書」。

\* 36 鷹司氏注1論文(一八四頁)に、「悲田院等による貧民救済の聖徳太子の精神を継承する四天王寺の有り方に模つてかこの時の大坂開帳では多大の喜捨を行つてゐる。」とあり、「三都開扉」元禄七年十一月十一日の記録「本尊奉拜之施物ハ長吏に渡之候 四ヶ所の手下並ニ鉢開外之札非人等ハ御印文渡所ニて一人二米一升ツ、引御印文頂戴所ニ而御印文一枚ツ、渡之、」が紹介されている。「しんとく丸」の世界はまさに非人救済事業と結びついてゐるため、これを下敷にするのは最適の選択であつた。

\* 37 朝日新聞社蔵版『近松全集』第四卷(一九二六)。本文引用もこれによる。

\* 38 鷹司氏注1論文に「元禄七年開帳の折四天王寺で貧賤の人々に「御印文写し」を頒布したとあるのは木製模印の捺押紙であつたろう。」と記される(二〇〇頁)。

\* 39 近石泰秋氏は、『正本近松全集』第三十三卷(一九八八年、勉誠社)解題で、「行文中おのずから近松の作風と思わせる所が所々に見出される。」(三五二頁)と記されるが、作風は加賀掾の諸作

品に類似するところもある。

\*40 「風来六々部集」(近代日本文学大系『狂歌俳文集』) 八二七〜  
八二八頁。